

葵卷の光源氏と六条御息所

——「ことづく」の織りなす関係性

はじめに

それ以前には点描されるだけに過ぎなかつた六条わたりに住む女が、葵卷にて突如「六条御息所」として再登場を果たし、この女性に焦点が当てられていく。そこでは極めて高貴な身分であるにもかかわらず、光源氏から身分相応の待遇を受けることなく苦悩する六条御息所が描かれていく。

光源氏と六条御息所の軋轢は、作中で繰り返し描写される。葵卷以前、まだ六条わたりに住む女という情報しか読者に与えられていなかった時点から、既に両者の関係に生じた亀裂は示唆されていた。

六条わたりに、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなる

落谷雄輝

まで思ししめたる御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることいとさまさまなり。

(夕顔①一四七頁)¹

葵卷に入ると、光源氏との不和は一層顕在化し、それを一つの主題として物語は展開していく。光源氏に対する桐壺院の訓戒、葵祭で起こった車争い事件、凄絶たる生霊事件——光源氏の軽薄さや、六条御息所の苦悩の描写を体現するような出来事が次々と起きていく。そして次巻賢木巻で六条御息所は伊勢へと下向し、光源氏のもとを去っていく。

葵卷、賢木巻での六条御息所をめぐる展開について大朝雄二氏は、正妻である葵の上を亡き者とし自らも伊勢に下ることでの紫の上を女主人公の座に位置づけたという構想上の意義を見出す。だがその一方で、氏は「御息所が病死などの御都合主義的な退出の仕方ではなく、壮烈といたいほどの苦悩を背負って、自決するようにして退場するところに、物語作者の筆の冴えがあった」と

も述べる。六条御息所をめぐる一連の物語が、構想論上の意義に収斂するものではないことは確かであろう。

そのように考えてみると、光源氏と六条御息所の関係性については随所にその確執を象徴するような意匠が凝らされていることに気付かされる。例えば、六条御息所と同様に、葵巻にて初めて本格的に登場する女性として、朝顔の姫君がいる。六条御息所に對して「いかに人に似じ」(葵②一九頁)と強く思い、光源氏の愛を拒んでいく朝顔の姫君は、六条御息所と対比的に描かれていることは既に多く指摘されてきた。田坂憲二氏は、「朝顔の姫君が源氏の愛を拒み通すには、抽象的な愛への不信心や心強さだけでは不十分なのであり、六条御息所の愛の生活の不幸な結末を見せられることによって、初めて、源氏を拒む女君としての立体感を寄与されるのである」と論じるが、逆の見方をすれば、朝顔の姫君の徹底的な光源氏拒絶もまた、それが叶わない六条御息所の悲劇性を補強する効果をもたらしているともいえるだろう。あるいは、光源氏と六条御息所の馴れ初めは物語のどこにも描かれていない。それについては、玉上琢彌氏が欠巻「かがやく日の宮」巻に両者の馴れ初めが描かれていた可能性を提唱したが、長谷川和子氏は、六条御息所の情報は現存する巻が十分に示しており、「かがやく日の宮」巻に記述されてはならないという必然性はないと指摘する。もし両者の馴れ初めが敢えて省筆されておるとするならば、それによって最初から両者の関係不和の印象を植え付けることに貢献しているといえるだろう。

本稿では、光源氏と六条御息所の関係性について物語はどのよ

うに象徴させてみせているのかを表現の面から着目し明らかにしていきたい。とりわけ注目したい表現は「ことづく」という動詞である。『源氏物語』作中において幾度となく使用されるこの語が、光源氏と六条御息所に關して使用される時、際立った特徴が見えるのである。そのことからこの語が両者の関係を象徴することに寄与しているのだと考えられる。『源氏物語』全体の「ことづく」の用法を踏まえつつ、そこから逸脱する光源氏と六条御息所における「ことづく」について考察していきたい。

一 「ことづく」の語

『源氏物語』には、名詞形「ことづけ」を含めると全四十二例の「ことづく」を確認することができるが、『源氏物語』に先行する作品、あるいは同時代の作品における「ことづく」の用例数を見ると、「土佐日記」一例、『平中物語』二例、『うつほ物語』二例、『落窪物語』一例、『和泉式部日記』一例、『紫式部日記』一例など、いずれにしても一、二例に留まっていることが分かる。作品ごとの文量差を考慮したとしても、『源氏物語』における「ことづく」の用例数の多さは際立っているといえるだろう。ここから『源氏物語』がこの語を何らかの意味をもって用いていると考えられるのである。『源氏物語』が豊かな表現性を有していることは周知の通りであるが、「ことづく」という表現においても、その機能を存分に發揮させることによって、作中人物の関係性や、社会的状況を巧みに描き出していると考えられる⁸⁾。

「ことづく」は、「他のことにことよせる。口実を設ける。か

こつける。託す」と「人に頼んで、先方にことばやものなどを伝えてもらう。伝言する。依託する」という二つの意味を有する。

『源氏物語』における「ことつく」全用例の内、その殆どが前者の意味で使用されている。¹⁰そこで本稿で扱う「ことつく」も前者の意味で使用される例について考察していく。

「ことつく」が口実を設ける動作である以上、その行為の動因は他者（あるいは社会）にとつて本来受け入れがたい行為を実現させようとするところである。簡略に形式化すると、次のようになる。

口実にことつけて、本来の目的を隠して、行動を起こす。

このように考えると、「ことつく」は、「口実による行動」と「本来の目的」を示しているといえるだろう。

一例として、若菜下巻の明石の女御の例を見てみたい。

女御の君にも、対の上にも、琴は習はしたてまつりたまはざりければ、このをり、をさをさ耳馴れぬ手ども弾きたまふらんをゆかしと思して、女御も、わざとありがたき御暇を、ただしばしと聞こえたまひてまかだたまへり。御子二ところおはするを、またも気色ばみたまひて、五月ばかりにぞなりたまへれば、神事などにことつけておはしますなりけり。

（若菜下④ 一八二頁）

光源氏は朱雀院五十の賀に備えて女三宮に琴を教えていた。明石の女御は光源氏から琴を習ったことがなかったため、この機会に光源氏の琴の音を聴きたいという願望を抱く。それが波線をついた部分にあたる。そこで明石の女御は今上帝に宮中を退出して六条院に里居する許可を願ひ出る。その時に明石の女御は、「神事」を口実に用いるのである。身重であることが神事の穢れにあたるのだと「ことつく」ことよつて、帝から里居の許可を得る。これを先ほどの形式に置き換えると、次のようになる。

光源氏の琴を聴くために、妊娠による神事への穢れにことつけて、里居の許可を得る。

こうして見ると、「妊娠による神事への穢れのために、里帰りをする」という表面的な目的行為と、「光源氏の琴の音が聴きたい」という本来の目的が示されていることが分かる。このように、「ことつく」は、口実による行動とその裏にある本来の目的という二つを提示してみせるのである。

ところで、作中人物の行動が本来の目的とは別の事柄に託けられる時に必ず「ことつく」という語が使用されるわけではない。

「何かは。この君たちのすきたまはむは、見どころありなむかし。もて離れてな聞こえたまひぞ。御返り時々聞こえたまへ」とて教へて書かせたまつりたまへど、いとどうたておぼえたまへば、乱り心地あしとて聞こえたまはず。

玉鬘のもとに螢宮から文が届いた場面である。光源氏は玉鬘に返事をするように促すが、玉鬘はそれに応じない。この時、応じない理由として「うたておぼえたまふ」という心情と、「乱り心地あし」という状態という二つの要素が提示されている。だが、この一文では「とて聞こえたまはず」というように、「ことつく」という語が見えない。このように、同種の状況であったとしても、「ことつく」と表記される場合と、されない場合があるのである。敢えて「ことつく」という語が使用された時、そこにどのような意味が込められているのであろうか。

まず一つは、「ことつく」と示された時点で、その行為があくまで建前上のものでしかないことが明確化されることである。何故なら、「ことつく」という語に「口実」という意味が含まれる以上、その語を伴いながら示された理由は口実であることが決定づけられるからである。するとそこで交わされたやり取りが真情を伴わない上辺だけのものであることが自ずと観察させられるのである。

加えて、その目的行為があくまで口実でしかないとするならば、その裏に別の、個人的な感情が確かに存在することが示唆されることになる。それはすなわち「ことつく」と表記することで、表面化した目的行為の裏にある真意へ読者が注意を向けるように呼びかけていることを意味する。先に示した明石の女御の例は、明確に本来の目的が示されているが、『源氏物語』作中用例を見ると、口実の裏にある真意が明瞭に示されない例が多い。だが、そ

のような場合であっても、目に見える表面上の目的が「ことつく」の語によって口実であると示されている以上、読者はその裏にある何かについて想像せざるをえないのである。「ことつく」には行為の背後にある個人的感情を浮き彫りにするという機能があると考えられる。

二 光源氏と六条御息所の「ことつく」

そこで光源氏と六条御息所の間で使用される「ことつく」について考察する。本稿では、全五例を両者に関する「ことつく」として取り扱っていくが、いずれも葵巻と次巻賢木巻に限った用例である。これは、光源氏と六条御息所の関係が特に中心的に語られるのがこの連続する二巻であることを考えれば、不自然なことではない。まずは、取り扱う用例を含む該当場面を並べてみたい。

A まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮にあたまひにしかば、大將の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。

(葵②一八頁)

B 御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん、といとほしくて参てたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、柵の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとは思し

ながら、「なぞや。かくかたみにそばそばしからでおはせかし」と、うちつぶやかれたまふ。

(葵②二六―二七頁)

C 「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいいたう苦しげにはべるを、え引き避かだなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから、

「袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき

山の井の水もことわりに」とぞある。

(葵②三四―三五頁)

D 大将の君は、二条院にだに、あからさまにも渡りたまはず、あはれに心深う思ひ嘆きて、行ひをまめにしたまひつつ明かし暮らしたまふ。所どころには御文ばかりぞ奉りたまふ。かの御息所は、齋宮は左衛門の府に入りたまひにければ、**い**とどいつくしき御浄まはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。

(葵②五〇頁)

E やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりととも、世人も聞こえあつかひ、宮の内にも心ときめさせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことにうしと思すことこそありけめと知りはてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄て

て、ひたみちに出で立ちたまふ。親添ひて下りたまふ例もことになけれど、**いと見放ちがたき御ありさまなるに**ことつけて、うき世を行き離れむと思すに、大将の君、さすがに今はとかけ離れたまひなむも口惜しく思されて、御消息ばかりはあはれなるさまにてたびたび通ふ。

(賢木②八三―八四頁)

便宜上、アルファベットを付した。各場面を概観していく。Aは、葵巻でこれまで六条わたりに住む女として点描されてきた六条御息所が、初めて「御息所」として登場を果たす場面である。この時、六条御息所が前坊妃であったことや、齋宮の母であることも初めて明かされる。そして娘である齋宮が幼い様子であることを口実に伊勢に下向しようかと考えあぐねている胸中が語られる。

Bは、六条御息所が光源氏に「ことづく」場面である。葵祭で起こった悲劇的な車争い事件を聞いて同情した光源氏は、六条御息所の邸を訪れる。だが、六条御息所は対面しようとしな。この時、六条御息所は「榊の憚り」を口実にすることで対面拒否の姿勢を貫く。光源氏は、仕方のないことだと思う一方、不服も感じる。

Cは、物思いに乱れ苦しむ六条御息所のもとに光源氏が訪問した後の場面である。二人は一夜を共にするが、翌日再び光源氏が六条御息所のもとを訪れることはなく、文だけが夕暮れ方になってようやく届く。そこに書かれた内容は、正妻葵の上の病状が悪化して手が離せない、といった内容であった。文を読んだ六条御

息所は、この内容を「例のことつけ」だと判断した上で、光源氏に返事を差し出す。

Dは、生霊事件によって葵の上を亡くし、意気消沈した光源氏が、これまで通っていた女性たちのもとに通わなくなったことが語られる場面である。一部の女性とは文のやり取りだけは交わすものの、六条御息所にはそれすらも行わず、すっかり疎遠になっていることが説明される。その疎遠について、光源氏は「いとはいづくしき御浄まはり」を口実にする。

Eでは、葵巻の次巻、賢木巻序盤の叙述で、Aの場面で語られていた伊勢下向のことが再び語られる。ただし、Aでは「下りやしなまし」という逡巡でしかなかったが、ここでは「うき世を行き離れむ」というように強い意志が変わっている。ここでもAと同様、口実には娘齋宮の有様が用いられている。

なお、Dの場面における「ことづく」の主語にあたる人物について、解釈が分かれている。多くの注釈¹⁾は、光源氏を主語にとるが、『大系』は、逆に六条御息所が主語であると解釈しており、『湖月抄』『新釈』『玉上評釈』は、互いに口実し合っているのだという折衷案を採用している。だが、「所どころには御文ばかりぞ奉りたまふ」という光源氏の対応が語られた後に続く一文であることを踏まえると、ここで「ことつけて聞こえも通ひたまはず」という態度をとるのは光源氏であると解釈するのが穏当であろうと考える。また、ここより後の場面で六条御息所が光源氏に葵の上追悼の文を送る。もし「ことづく」の主語が六条御息所だとすれば、ここでの挙動に矛盾が生じてしまう。さらにその追悼文に対して返信する際に光源氏が「齋宮の御浄まはりもわづらはしく

や」(葵②五二頁)と躊躇している。このことの照応を考えると、やはり「ことづく」の主語は光源氏として読むべきである。よって本稿では多くの注釈が採るように、Dの「ことづく」の主語を光源氏と解釈して考察を行う。

三 共通の口実

以上に掲げた五例を整理してみると、A・B・Eが六条御息所による「ことづく」で、C・Dが光源氏による「ことづく」である。まず六条御息所による「ことづく」だが、AとEに関しては、直接的には伊勢下向を執行するための「ことづけ」であり、その意味では「ことづく」相手は不特定多数である。世間に対する「ことづけ」であるというのがより適切であろう。だが、六条御息所の伊勢下向自体は光源氏の待遇の心許なさが要因となっており、その意味では光源氏と六条御息所の関係性とは切り離すことのできない用例であるといえるだろう。Bに関しては、直接光源氏に向けて使用される例である。

対して、光源氏による「ことづけ」。Cの「ことづけ」に関しては、地の文ではなく六条御息所の心内文に使用されている例であり、光源氏が「ことづ」けていると判断しているのは、語り手ではなく六条御息所であることに注意が必要である。これについては後で詳しく考察する。Dは、光源氏が六条御息所に対して「ことづけ」たことが地の文にて語られている。

ここで注目すべきことは、六条御息所が光源氏に対して「ことづく」場面と、逆に光源氏が六条御息所に対して「ことづく」場

面という両方の用例が存在しているということである。いわば、光源氏と六条御息所は作中互いに「ことつけ」合っている関係性を有しているのである。『源氏物語』における「ことづく」の全用例を見ても、このように互いに「ことつけ」合う人物関係は他に見えない。光源氏と六条御息所だけが、ある時には相手に「ことつけ」を提示し、ある時には相手から「ことつけ」を突き付けられるという奇妙な関係性で結ばれているのである。

二節で確認した「ことづく」という語の性質を踏まえて、この関係性の意味を考えると、まず両者の関係が上辺しかないとすることがあげられよう。佐貫新造氏は、葵巻冒頭に掲げられた両者の関係性について次のように指摘する。

御息所は光るとの年齢の不釣合を気にしてうちとけず、光るは御息所のそうした態度に気兼ねしているかのように振舞うといふことは、各々がお互の間の最も信実なものを失い果てているといふことである。それはかつて二人の出逢いの中にあつた信実が、今もなお同じように存在しているかの如くに見せかけるための、自他両面に向つての偽装である。(中略) まるで示し合せたかのように、彼等はそれぞれに一つの虚像をつくりあげてそれを世間に対して掲げる。そしてその虚像と現実との距離を絶えず測定しながら、自分が現在喪失しつつあるもの、従来の価値観から次第に遠ざかつていく自己を探るのである。

こうした両者の態度は、まさしく「ことづく」という言葉に

よつて象徴されるのではないだろうか。真意を隠し口実を掲げる「ことつけ」はまさしく「偽装」する態度である。両者は「ことづく」ことを通して、虚像の自分を相手や世間に提示してみせているといえる。それはもはやそのようにすることでしか保てない関係性の脆弱さをも示唆するのである。

さらに両者の「ことつけ」には特筆すべき点がある。それは、用いている口実の内容が共通の要素をもっているということである。そこでBとDの場面をもう一度確認したい。まずBの場面において、六条御息所が用いている口実は、「榊の憚り」である。娘齋宮の卜定に伴つて、六条御息所邸には不浄を避けるための榊が設置される⁽¹³⁾。六条御息所は光源氏の訪問が不浄にあたるとして対面を拒否するのである。対してDの場面。光源氏が提示する口実は、「いとどいづくしき御浄まはり」である。齋宮が初齋院の場である左衛門府に入ったことで、より一層厳しい潔齋が要されることを受けている。光源氏は、文のやりとりが不浄にあたるとして、交流を完全に断つのである。こうして見ると、どちらも、齋宮の潔齋が口実内容になっていることがわかる。さらに、AとEの六条御息所の伊勢下向思案の口実に齋宮の幼い有様が用いられている。つまり、六条御息所の「ことつけ」はすべて娘齋宮にまつわる口実なのである。光源氏と六条御息所は齋宮の潔齋を口実にするこゝとよつて互いを避けるという共通の「ことつけ」を行なっていることがわかる。「ことつけ」合う関係性というだけでも『源氏物語』において特異であるが、その上内実まで共通するということとは偶発的な結果であるとはいひ難い。このことには確かに両者の関係の性質を象徴する何らかの意味があるはずであ

る。

四 「例のいひつけ」

六条御息所と光源氏の間に見える「ことづく」が斎宮の潔斎に関する内容であるという共通点を有していることを指摘したが、Cに関してはそうではない。C直前の文の内容は、斎宮の潔斎に関わる内容ではなく、葵の上の病状悪化についてのものである。何故、Cのみ斎宮潔斎とは無関係の「ことづけ」なのか。それは、この用例が他とは位相の異なるものだからである。

「ことづく」の語がどの視点から使用されているかに注目すると、BとDの用例は地の文で使用されている。いずれも「ことづく」人物に寄り添った叙述であるため、その人物の「ことづく」意思を読み取ることができる。また、AとEに関しては、口実を設けようとする六条御息所自身の心内文で使用されている。だが、Cを見てみると、「ことづけ」であると判断しているのは、地の文でもなく文を送った光源氏自身でもなく、文を受け取った六条御息所なのである。そこに真意を隠すため口実を設けようとした光源氏の意識があるかどうかを根拠付けるための直接的な要素はない。ここで使用される「ことづく」は、その行為自体が建前上のものであることを暴く他の「ことづく」とは別個の機能を果たすのである。

もちろん、光源氏の中に、葵の上の病状を口実として用いようという意識がなかったとはいえない。文を送る前日、六条御息所邸を訪問した光源氏はしきりに葵の上の病状を持ち出し弁明

する。

心より外なる怠りなど罪ゆるされぬべく聞こえつづけたまひて、なやみたまふ人の御ありさまも愁へきこえたまふ。「みづからはさしも思ひ入れはべらねど、親たちのいとことごとしう思ひまどはるるが心苦しさに、かかるほどを見過ぐさむとてなむ。よろづを思しのどめたる御心ならば、いとうれしうなむ」など語らひきこえたまふ。

(葵②三三〜三四頁)

確かに葵の上を口実に用いたものであると読めなくもない。だが、葵の上の病状を六条御息所と距離を置くことに利用しているのだと判断できる材料はどこにも存在しない。それどころか、次に見るように、葵の上を真摯に看病する光源氏の姿を物語は描こうとするのである。

心苦しきさまの御心地になやみたまひても心の心細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰も誰もうれしきものからゆゆしう思して、さまざまの御つつしみはさせたてまつりたまふ。かやうなるほど、いとど御心の暇なくて、思しおこたるとはなけれど、途絶え多かるべし。

(葵②二〇頁)

葵の上懐妊場面である。ここでも光源氏の六条御息所邸訪問の途絶えが語られるが、それは葵の上の妊娠により一層慌ただしく

なり、心の暇がなくなつたことが理由であることが示される。光源氏がそれを口実に訪問を途絶えさせようとする意識は読み取れない。むしろ、「思しおこたるとはなけれど」とあるように、訪問が途絶えてしまうことが決して本意なことではないことが示されている。

大殿には、御物の怪めきていたうづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。

(葵②三一―三二頁)

次にあげたのは、葵の上が物の怪に悩まされ始めた場面。ここでも「御歩き」が不都合である状況が説明され、六条御息所邸はおろか、自邸であり紫の上もいる二条院にすら足を運ぶことの困難であることが語られる。また、葵の上を気遣い、真摯に対応する光源氏の姿も描かれる。ちなみに六条御息所を見舞うために邸を訪問するのは、この後のことである。前に述べた通り、これらをもって光源氏に葵の上の病状を口実として六条御息所から距離を置こうとする意識がなかったとい切ることとはできない。だが、少なくとも物語の叙述がそれを助長するような描き方をしていないということに注意すべきである。Cでは光源氏の「ことづく」意識よりも、むしろ「ことつけ」だと受け取る六条御息所の意識

の方が焦点化されているのではないだろうか。六条御息所の葵の上に対する意識は、葵祭での車争い事件を発端に増大していき、六条御息所を苦悩させる。

世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思しよらざりけり。

(葵②三三頁)

そして光源氏が見舞いのため邸を訪れ、翌朝帰っていく姿を見た六条御息所は、その美しい姿に心惹かれる一方で、また葵の上に関する嘆きを心中で吐露する。

やむごとなき方に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、ひとつ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ暮れつつある。

(葵②三四頁)

こうした懊悩の最中、追いつちをかけるようにして、光源氏は文だけを送る。しかもその内容はやはり葵の上病状に関するものであった。それを読み六条御息所は「例のことつけ」だと判断するのである。葵の上への寵愛によつてますます光源氏の心が自分

から離れるのではないか、という疑念が、文によってさらに深められるのである。ここでは、光源氏に「ことつく」意識があったかどうかはもはや問題ではない。光源氏のこうした文言に対して六条御息所が「ことつけ」を受けたという意識を抱いていること自体が重要なのである。光源氏の自分に対する言動に誠意があることを信頼できなくなっていることが、ここでの「ことつけ」という語によって顕著になるのである。ここでの叙述が、「と、ことつけてあるを見たまふものから」などではなく、「とあるを、例のことつけと見たまふものから」となって、六条御息所の判断であることが明確に示されていることから、ここでの力点が光源氏の意識ではなく、六条御息所の意識に置かれていることが明らかである。

加えて、この判断が単なる「ことつけ」ではなく、「例のことつけ」とされていることも注目したい。言うまでもなく、「例の」とは、「いつもの」という意味を表す言葉であるが、ここでの「例の」は、光源氏がいつも葵の上の病状を口実にするという、個別の事例を指しているのではなく、「ことつく」という言動そのものを指して使われているのではないだろうか。つまり、普段からの光源氏の言動ひとつひとつに誠意を感じられなくなっており、どの行動をとってみてもそれが上辺だけの「ことつけ」にしか取れなくなっている様が「例の」という語に込められているのではないだろうか。「ことつく」は動作する本人の真情の欠如を示すだけでなく、他者の言動に対して「ことつけ」だと判断することから不信感を示すことでも機能しているのである。

そうしたことから、Cは他の用例とは位相の異なるものとして

捉えるべきであろう。齋宮の潔斎を口実としていないことも、こうした位相の相違によるものであると考えられる。

五 相反する真意

三節での口実内容の考察を踏まえて、次に「ことつけ」の裏にある真意について見ていきたい。まずはAとEの六条御息所の伊勢下向に関する「ことつけ」の真意を確認する。

Aの場面における六条御息所の真意に該当するのは引用本文に波線を付した部分、「大将の御心ばへもいと頼もしげなき」ことである。前にも引用した佐貫氏は、「かねてより」という箇所には、はじめからくいちがいががあるのであり、この二つのものが堪え難いまでに隔たってしまった時点において、御息所の伊勢下向の意志が働き始め」と述べる。葵巻以前にも光源氏の無沙汰は点描されていたが、そうした光源氏の薄情さこそが、六条御息所の伊勢下向への思いを掻き立てるのである。そこには光源氏からの寵愛を受けることを諦め、自らの恋情をも断絶しようという真意が浮かび上がってくるのである。Eの「よろづのあはれを思し棄てて」という部分には、まさしく未練断絶の意思が色濃く出ている。そうした真意を隠し、世間に対する表面上の理由として齋宮の幼さを持ち出すのである。

ところで、A・Eに見える伊勢下向に際する場面について、特にEの引用で囲い文字にした直前部分、「親添ひて下りたまふ例もことになけれど」をめぐって、古注以来、微不至女を準拠とす

る説が数多く指摘されてきた。その説に異議を唱える余地はないものの、この「親添ひて下りたまふ例もことになけれど」を、徽子女王を導き出すための叙述として捉えるだけでよいのだろうか。ここで「ことになけれど」というのは、作中においてそのような事例が受け入れがたい行動であることを示すこともしているはずである。本橋裕美氏は、六条御息所の伊勢下向について、「六条御息所自身に伊勢下向の経験はない。奉幣にも制限の多い伊勢大神宮近くに、齋宮の母とはいえ宮家でもなく、後の位を持つわけでもない六条御息所が滞在することは、原理的に許されないだろう」と指摘する。徽子女王を彷彿とさせながらも、徽子女王以上に伊勢下向が困難であることが「親添ひて下りたまふ例もことになけれど」という叙述により印象づけられるのである。

加えて「幼き御ありさま」「いと見放ちがたき御ありさま」と形容される娘齋宮は、賢木巻にて十四歳であることが明らかにされる。葵巻は賢木巻の前年の出来事が語られる巻であるから、葵巻時点では既に十三歳であることが想定される。ところが史実上の齋宮の卜定時年齢¹⁶と照らしあわせてみるとこの年齢が低すぎる年齢であるとはいえない。齋宮の幼さというのが、年齢によるものではなく素行などによる判断である可能性もあるが、「若き御心に、不定なりつる御出立のかく定まりゆくを、うれしとのみ思したり」¹⁷（賢木②九一頁）と、確かに幼い様子が描かれるものの、単独の伊勢下向に支障が出るほどのものとはいえない。このことを踏まえると齋宮が幼い様子であることが世間に六条御息所伊勢同行を納得させるほどの正当な理由になりえない。口実としてはあまりにも緻密さに欠けるのである。そのことは理知と教養のあ

る六条御息所であれば重々承知していたはずである。それにもかかわらず、伊勢同行の口実に齋宮の幼さを持ち出そうとするのは、他に術がないことに加えて、光源氏への未練断絶という意志が極めて切迫したものであったためであろう。「ことづく」には裏にある真意を浮き彫りにする機能があることは既に確認したが、ここでは状況の困難さが強調されることで、六条御息所の真意を主題としてより鮮烈に浮かび上がらせているのではないだろうか。

次にBの場面。光源氏の視点に則して叙述されていることもあり、AやEのように直接的に真意にあたる部分が示されていない。だが、これが「ことづけ」であると語られている以上、六条御息所の対面拒否には齋宮の潔斎とは別の真意が秘められていることは確かである。この場面は、車争い事件の後の場面である。車争い事件は六条御息所にとって光源氏の正妻、葵の上と自らの立場との決定的な落差を思い知らされる出来事であった。それによる光源氏との関係性への絶望、そしてそれに起因した光源氏への未練を断ち切ろうとする意志を読み取るべきであろう。こうした心情はこの場面の後、光源氏と源典侍との応酬場面を挟んだあと、再び六条御息所の状況が語られる際に、「つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんこと」（葵②三〇―三一頁）という逡巡が綴られていることから明らかである。光源氏の訪問を強固に拒むのも、光源氏の未練を断絶する意志による行動だといえる。こうしてみると、六条御息所の「ことづく」は、一貫して光源氏への未練を断ち切ろうとする意志を浮き彫りにしている。光源氏を自らと遠ざけることによって、辛うじて光源氏への恋情を抑止

しているのである。こうした六条御息所の性質は、賢木巻冒頭、Eの直後に見える、

対面したまはんことをば、今さらにあるまじきことと女君も思す。人は心づきなしと思ひおきたまふこともあらむに、我はいますこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

(賢木②八四頁)

という心内描写にも垣間見ることができぬ。

対する光源氏の「ことつけ」の真意を検証する。Cは、四節で述べたように六条御息所の主観によるものであるため、Dについて考える。ここでの光源氏は、六条御息所だけでなく二条院に住む紫の上を含めあらゆる女性と距離を置いている。これはいうまでもなく生霊事件によって正妻葵の上が逝去したことを受けての悲嘆によるものである。だが、「所どころ」の女性たちに対しては文のやりとりは交わっていた。それに対して六条御息所とは文のやりとりさえも行わない。こうした他の女性たちとは一線を画するほどの徹底した交流断絶の真意とは何か。それは、六条御息所に対する忌避感にほかならない。光源氏は生霊事件に直面した際、葵の上にとり憑いた生霊の正体が六条御息所であることをまざまざと見せつけられる。その際に「目に見す見す、世にはかかることこそはありけれど、疎ましうなりぬ」(葵②四〇頁)と嫌悪感を抱く。六条御息所の方から光源氏に申問の文が届けられた時にも、「何にかんことをさださだときげやかに見聞きけむと悔しき

は、わが御心ながらなほえ思しなほすまじきなりかし」(葵②五二頁)と叙述されるように、事件によってはや取り戻そうにも取り戻せないほど決定的に六条御息所への情愛が喪失してしまっていることがわかる。こうした忌避感を抱く故に、光源氏は六条御息所との交流を断絶しようとするのであった。その時、単に喪中であるということではなく、対六条御息所専用の「ことつけ」として齋宮の潔斎という口実を用いたのであった。

おわりに

「ことつく」は、示された動機があくまで口実でしかなく、そのこの言動が表面的なものにすぎないということ暴露性質をもった語である。六条御息所と光源氏が、互いに「ことつく」とは、両者の関係がもはや真情の伴わない皮相的なものであることを如実に表わすのである。また両者の「ことつけ」は、齋宮の潔斎を口実にして相手と距離を置こうとするという点で共通する。だが、「ことつく」ことで浮き彫りにされた裏の感情に目を向けてみると、両者は正反対の真意を秘めていることがわかるのである。一方の六条御息所は、相手への棄てようにも棄てきれない未練を断ち切るため、もう一方の光源氏は、取り戻そうにも取り戻せない情愛の喪失のためであった。こうした対極的な真意から発せられるにもかかわらず、奇しくも共通の性質を帯びた「ことつけ」を作り上げ、互いに突き付け合うのである。物語はこうした両者の真意の齟齬を敢えて同一の「ことつけ」を用いることによって、その決定的な隔たりを克明に浮かびあがらせているの

ではないだろうか。ただでさえ、互いに「ことづく」合うという、極めて特異な関係性をもつ両者であるが、物語はそれによって両者の上辺だけの関係を暴くのに留まらず、その裏にある真意の落差までをも読者に見せつけるのである。加えて、「ことづく」という動作を行う側からだけではなく、相手の行為を「ことづく」だと判断し、相手に対する不信感を表現することで、多面的に両者の関係性の脆弱さを示しているのである。

葵巻における光源氏と六条御息所の関係の瓦解は、物語展開によって示されるだけではなく、多面的な技巧によって殊更に象徴されていく。とりわけ「ことづく」に注目すると、その使用法は極めて特異であり、それ故、両者の関係性の深刻さがより強く印象付けられている。そして次巻の賢木巻にて六条御息所が野宮に舞台を移すと、物語は打って変わったように情感溢れる場面を用意するのである。ここには、光源氏と六条御息所の関係性一つの主題として描き出そうという物語の熱意が感じ取れるのである。そして「ことづく」は、葵巻における両者の関係性の確執を巧妙に表現することに多大なる貢献を果たしているといえる。

注

- (1) 本文の引用はいずれも『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠り、それぞれ巻名、巻数、頁数を示した。
- (2) 大朝雄二「六条御息所の苦惱」（『講座 源氏物語の世界 第三集』、有斐閣、一九八一年）
- (3) 田坂憲二「朝顔の姫君の構想に関する試論—葵巻を中心として—」（『源氏物語の人物と構想』、和泉書院、一九九三年）
- (4) 玉上琢彌「源語成立攷」（『源氏物語評釈別巻 源氏物語研

究』、角川書店、一九六六年）

- (5) 長谷川和子「輝く日の宮」の巻について」（『源氏物語の研究』、東寶書房、一九五七年）

- (6) 注1『新編日本古典文学全集』の本文に基づく用例数。なお、池田亀鑑編『源氏物語大成』（中央公論社）の本文でも同様の用例結果となった。

- (7) いずれの作品も『新編日本古典文学全集』（小学館）の本文に基づく用例。

- (8) 「ことづく」という語に関しては、『源氏物語』全体を通して様々な機能を發揮していると考えられるが、本稿では光源氏と六条御息所間で使用される「ことづく」のみに焦点をあてた。それ以外の「ことづく」に関する考察については、別稿を期したい。

- (9) 『日本国語大辞典 第二版』（小学館）

- (10) 「かの人もいかに思ふらんといとほしけれど、かたがた思はしかへして御ことづくもなし」（空蟬①一三〇頁）、「みづからも、似げなきことも出で来ぬべき身なりけりと心憂きに、えのどめたまはず、まかでさせたまふべきさま、つきづきしきことづくでも作り出でて、父大臣など、賢くたばかりたまひてなん、御暇ゆるされたまひける」（真木柱③三八六―三八七頁）、「若君、内裏へ参らむと宿直姿にて参りたまへる、わざとるはしき角髪よりもいとをかしく見えて、いみじくうつくしと思したり。麗景殿に御ことづく聞こえたまふ」（紅梅⑤四七頁）の三例は、注9『日本国語大辞典』における後者の意味で使用された、もしくは後者の意味を含みうる用例といえる。残り三十九例については、前者の意味で使用されていると見なして差し支えない用例である。

- (11) 本稿にあげた注釈については、以下の注釈書を使用した。『大

- 系』＝『日本古典文学大系』（岩波書店）、『湖月抄』＝『源氏物語湖月抄』（講談社学術文庫）、『評釈』＝『源氏物語新釈』（群書類従完成会刊『賀茂真淵全集』所収）、『玉上評釈』＝『源氏物語評釈』（玉上琢彌校注、角川書店）。また参照した注釈書の内、「ことづく」の主語について言及しており、光源氏説を採用していた注釈は以下の通り。『萬水一露』（源氏物語古注集成）、『岷江入楚』（源氏物語古注集成）、『完訳日本の古典』（小学館）、『新潮日本古典集成』（新潮社）、『新日本古典文学大系』（岩波書店）。
- (12) 佐貫新造「葵」「賢木」における六条御息所と葵上」（『源氏物語の状況の人間像』、翰林書房、一九九七年）
- (13) 注1『新編日本古典文学全集』頭注
- (14) 注12に同じ。
- (15) 本橋裕美「六条御息所を支える「虚構」——中将御息所」という準拠の方法」（『日本文学』六一—二〇二二年一月）
- (16) 服藤早苗編『歴史のなかの皇女たち』（小学館、二〇〇二年）付録「伊勢斎宮表」（西野悠紀子、永島朋子、服藤早苗、伴瀬明美作成）によれば、事実上の歴代斎宮の卜定年齢としては徽子女王（八歳）、樂子内親王（四歳）、当子内親王（十二歳）などがあり、六条御息所の娘斎宮の年齢が決して低すぎることはないということがわかる。
- (17) 実際、六条御息所の伊勢下向については「世の人は、例なきことと、もどきもあはれがりもさまざまに聞こゆべし」（賢木②九一頁）とあるように、世間から取りざたされることになる。
- (18) 室伏信助「源氏物語の構造と表現——「賢木」巻をめぐる」
（紫式部学会編『古代文学論叢 源氏物語研究と資料』、武蔵野書院、一九六九年）に詳しい論考がある。

（ふさやゆうき 大学院博士後期課程在學生）